

肉眼ではみえない

「真理」でも

みることができ

(なぜ、A・スミスには資本主義社会しかみえなかったのだろうか)

伊藤 眞作

むかし むかし

ギリシヤ時代の大昔のこと

首都アテネの広場で

あの有名な大学者

アリストテレスが

さつきから

眩きをやめることがないのだ

「なぜ

五台のベッドが

一軒の家と

交換でるのだ

……

わしにも

大きな謎なのだ

……

誰が この答を

わしに ソツと

教えては呉れぬか

……」

ギリシヤ時代には

困難な設問に違いなかった

何故なら

奴隷は通貨としても

用いられていたからだ

「奴隷は
何年で使い切るのが
最適か」

こんな論文が
堂々と罷り通っていた
時代が 限界だった



二千年以上もの
時は流れた……

交易もすすみ
あの 奴隷の時代ではなく
イギリスから始まった
産業革命の時代に
突入しようと
していた

生産に要した
労働量によって
商品の価値が
規定されるという

すなわち
「労働価値説」

それは
イギリスの古典学派の
ペティに始まり
A・スミス、リカード
マルクスなどが
唱えた



しかし
同じ「労働価値説」
に立ちながら

A・スミスには

「資本主義社会」こそが
人類最後の社会だ
としか見えなかつたのに

対するマルクスの目には
肉眼ではみえない

「社会主義社会」

さらには

「共産主義社会」へと

これから発展し続け
て行く……

という

真つ向から対立する
真つ二つに 分裂した
のは何故か？



それは両者の労働観が
まるで

決定的に異なっていたからだ



A・スミスは

労働は、汚く、疲れ、忌まわしいもの、
としか見えなかつた

対するマルクスは、

A・スミスの挙げた労働は

何れも、労働運動により

除去可能なものばかりであり

やり甲斐があり、楽しく、積極的なものへ
と変化可能と捕らえていた



ゆえにマルクスは

これら「労働者の天国」に存在する
真理が、肉眼以上にアリアリと見え
自ら進んでその実践の先頭に立ち
「資本論」等、数々の著作と共に
その生涯を革命運動に投じた

(二千二十三年・六月・二四日)